

レオポルド美術館 エゴン・シーレ展 ウィーンが生んだ若き天才

東京都美術館（上野公園） 2023.01.26～04.09

「レオポルド美術館」（2001年ウィーン開館）は、世界的に名高い収集家「ルドルフ・レオポルド」の個人コレクションを展示する館で、20世紀前半の「エゴン・シーレ」「グスタフ・クリムト」などの主要な絵画やデッサンが含まれる、10～20世紀のオーストリアの主な芸術品数百点が展示されている。

「エゴン・シーレ」（1890～1918）は、ウィーン生まれの画家で孤独と苦悩を抱え、ナイーブな感受性を持って自己を深く洞察し、表現性豊かな線描と不安定なフォルムに鮮烈な色彩は、自分は何者かを問い続けた葛藤にも重なる。

本展は、「エゴン・シーレ」作品の世界有数のコレクションで知られる「ウィーンの「レオポルド美術館」の所蔵品を中心に、「シーレ」の油彩画、ドローイング「40点以上」を通して画伯の生涯と作品を振り返る企画である。

加えて、「クリムト」「ココシュカ」「ゲルストル」をはじめとする同時代作家たちの作品も合わせて「約120点」の作品を展示している。



エゴン・シーレ 《ほおづきの実のある自画像》 1912年 油彩/板 左
画面後方にある赤いほおづきは、熱情的な2人のシンボルである。



エゴン・シーレ 《ヴァリーの肖像》 1912年 油彩/板 右
モデルをつとめた恋人を向い合うように描かれた一対の肖像画である。

グスタフ・クリムト 《接吻》 1907～08年



「キス」を交わす男女は、新しく登場した芸術のテーマで、豪華な金地を背景に抱き合う男女を描いている。

男性の衣装は白と黒の長方形で、女性は赤や青などの楕円が描かれて、衣装の文様で男女が区別されている。

絵画の背景に「金」を使用しているのは、イタリア・ラヴェンナの教会の装飾や、日本の金屏風の影響があるとされている。